

誰かに教えたくなる 科学技術の話 91

古代文字の解読物語



東京大学名誉教授 月尾 嘉男

人間以外でも鳴声や動作で意思疎通する動物は多数存在するが、それらの動物と比較して人類が異常に発展した原因は文字を発明し、時間と空間を超越して意思疎通を可能にしたことである。これまで人間が発明した言語は数千種類にもなり、それを表記する文字は約四〇〇種類が存在しているが、現在も使用されている文字は六〇種類程度で、書籍や新聞で使用される文字は二八種類ではない。

しかし現在の社会では使用されていないが、古代の遺跡などに記録され、後世に発見された文字も世界には多数存在する。それらのうち発見された当時は解読できなかったものの、言語学者や場合によっては素人の努力によって解読された文字も多数ある。以下に紹介するのは遺跡から発見された読解できない古代の文字に挑戦し、その解読に成功した偉人たちの物語である。

ヒエログリフ

エジプトの古代王朝はピラミッドをはじめ多数の石像の建物や彫像を建造してきた。その表面に刻字された図形文字の一種ヒエログリフは四世紀頃までは使用された事例があるが、以後は途絶えて読

解不能になっていた。ところが十八世紀の最後にエジプト遠征をしたナポレオンの軍隊がアレキサンドリア近郊のロゼッタで堡壘^{ほろうい}を建造していたときに素晴らしい岩石を発見した。

発見場所から「ロゼッタストーン」と名付けられた縦一四センチ、横七二センチの岩石の表面の上段にはヒエログリフ（神聖文字）、中段にはデモティック（民衆文字）、下段にはギリシャ文字が刻字されており（図1）、同一内容が三種の文字で記録されていると推定され、何人もの学者が読解できると推定され、何人もの学者が読解できるギリシャ文字を参照してヒエログリフとデモティックの読解に挑戦したが成功しなかった。

そこに登場したのが一七九〇年生まれのJ・F・シャンポリオンで、十代で十



図1 ロゼッタストーン

カ国語以上を習得し、古代言語について論文を発表していた語学の天才である。ロゼッタストーンが発見直後から解読に挑戦し、それぞれが表意文字ではなく表音文字であることを見抜き、三十三歳になつた一八二二年に解読に成功し、結果を論文として発表した。これにより古代エジプトの文化が大幅に解明された。

楔形文字

世界四大文明を代表するメソポタミア文明はティグリスとユーフラテスの両河が北西から南東に流下する地域に紀元前四〇〇〇年頃に発生したが、そこで使用されていたのが楔形文字で、岩壁に刻字されたり、粘土板に道具で押印して記録されていた。現在までに発見された最古の記録はウルク遺跡で発見された紀元前三三〇〇年頃のもので、これまでに四〇万枚以上の粘土板が発掘されている。

この古代文字の解読に最初に挑戦したのはドイツの高校教師で言語学者の**G・F・グローテフェント**で、一八〇二年に古代ベルシャ帝国の帝都ベルセポリスの碑文の楔形文字が二人の古代の帝王の名前であると判読した。しかし当初は大学が論文を受領せず、ようやく一八二〇年

頃になつて解読した内容が正解であると認定され、現在では楔型文字の解読を先導した学者とされている。

通信技術が発達していなかつた当時は学術情報が簡単には流通せず、イギリスの優秀なオリエント学研究者の**H・C・ローリンソン**がバグダッドに駐留することになり、グローテフェントの業績を手することなく独自に研究に没頭し、一八三五年にイラン西部の岩山の中腹に彫刻されたダレイオス一世の業績を顕彰する**ベヒストウン碑文**(図2)の楔形文字

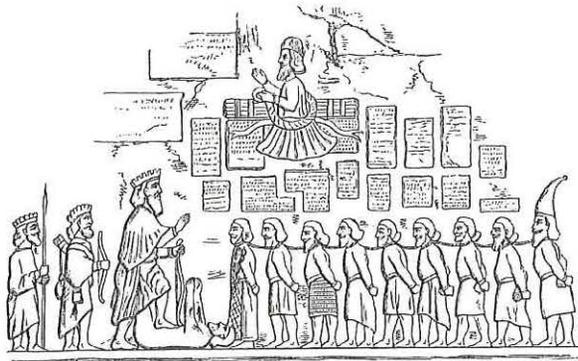


図2 ベヒストウン碑文

の解読に成功した。

線文字B

地中海とエーゲ海の境界に位置するクレタ島は四国の半分程度の面積で、紀元前三十世紀から二十世紀にかけてのミノア文明の時代には島内に一〇〇以上の都市国家が存在した。その中心都市イラクリオンの郊外にあるクノッソス宮殿を一九〇〇年に発掘調査したイギリスの考古学者**A・エヴァンズ**はヒエログリフのような聖刻文字と線文字Aと線文字Bが記

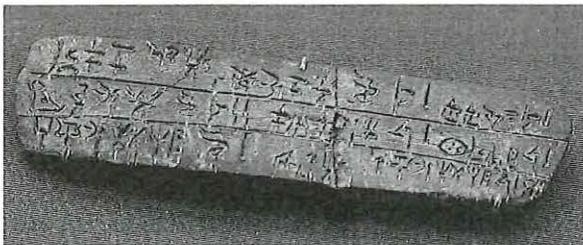


図3 エヴァンズの発見した線文字Bの粘土板

録された粘土板を発見した(図3)。

エヴァンズはまず線文字Bを解読しようとし、東側にあるキプロス島で使用されていたキプロス文字と関係があると推定してキプロス島で調査をするが、解読できないまま死亡した。それを継承したのがアメリカの古典学者A・コーバーである。彼女によって線文字Bの構造はかなり解明されたが解読までには到達せず、完全に解読したのはイギリスのM・ヴェントリスであった。

少年時代の一九三六年に教師に引率されてエヴァンズ主催のミノア文明の展覧会場を見学したときにエヴァンズに出会い、文字が解読されていないことを確認したヴェントリスは解読に挑戦するようになり、一九五三年に成功した。三〇〇年以前も過去の記録が現代に浮上したのであるが、残念なことに内容は王宮の細々とした記録でしかなかった。線文字Aは現在でも解読されていない。

マヤ文字

中米のユカタン半島には紀元前八〇〇年頃からマヤ文明が発生しており、紀元前三〇〇年頃からマヤ文字と名付けられる文字が使用されていた(図4)。ス



図4 マヤ文字

ペインが一角を侵略しはじめた十六世紀前半には使用されていたが、しばらくして忘却されていった。そこで十九世紀後半にカトリック司祭のC・E・B・ド・ブルブルが解読しようと努力を開始したが、成功しなかった。

第二次世界大戦後になり、遺跡から発見された碑文は解読されなかったものの言語の構造などは次第に解明されていった。まず一九五二年にソビエトの言語学者Y・クノロゾフは一部を解明したという論文を発表したが、当時は米ソ対立時

代の最中であつたため、アメリカの学会の中心人物のE・トンブソンは間違いだと批判し、多数の学者も追従せざるをえない状況であつた。

しかし一九七〇年代になって、アメリカの言語学者F・ラウンズベリーが現代のマヤ語族の言語を研究するとともに古代のマヤ文字も並行して研究し、クノロゾフの解釈が妥当であると支持した。さらに八〇年代になると解読は急速に進展し、アメリカの考古学者M・D・コウは一部の例外はあるものの、マヤ文字の八五%は読解できるようになっていると発表している。

ルーン文字

紀元一世紀頃から現在のスカンジナビア半島から北部ヨーロッパにおいてゲルマン民族が使用していた文字がルーン文字で、アルファベットとほぼ同数の二四文字で構成されるが、アルファベットのように大文字小文字の区別はない。発明の経緯は不明であるが、中部から東部のヨーロッパで初期のルーン文字の記録が発見されているので、その一帯が発祥地域と推定されている。

発明の由来について確定した見解は存



図5 ルーン文字の石碑

在しないが、南方のギリシャ文字や北部イタリア文字を参考にして、自分たちのゲルマン語系の言葉に適合するように変更したと推測されている。スカンジナビア諸国では中世後期まで使用され、それらの地域にはルーン文字で刻字された石碑が五〇〇〇ほど発見されているし(図5)、ルーン文字が刻印された硬貨も何種が発行されている。

さらに北欧諸国では八世紀頃から二四文字の字数を一六文字に減少させた**北ルーン文字**も作成されている。イングランドでは北方から伝達されたルーン文字と南方から伝達されたローマ文字が混在し、その証拠として両方の文字が刻字されている指輪などが保存されているが、一〇六六年にノルマン民族がイングラン

ドを征服して以後、ルーン文字は使用されなくなった。

甲骨文字

中国古代の紀元前十六世紀から紀元前十一世紀に存在した中国最古の王朝とされる殷朝の時代に登場した亀甲や牛骨に刻字された**亀甲獣骨(甲骨)文字**は世界最古の漢字で、現在使用されている漢字の初期の形態とされる。当初は甲骨に灼熱した金属を接触させて、その割目によって吉凶を判断していたが、紀元前十三世紀になると、その判断の内容を甲骨に刻字するようになった(図6)。

後世、甲骨は漢方医薬の原料として売買され、一八九九年に当時の文部長官で金石学者の**王懿榮**が持病の**マラリア**や治療のため薬屋から薬剤を購入したところ、



図6 甲骨文字

甲骨であったため研究を開始したという噂話が波及し、殷朝の首都のあった小屯に数万の人々が盗掘に到来するようになった。そこで政府は一九二八年に研究機関を設立して約二万五〇〇〇字の甲骨文字を発掘収集した。

これまで紹介した古代文字は現代では使用されていないため解読は困難であったが、中国では現代でも漢字が使用されており解読は容易であった。しかし一九四九年の中華人民共和国の建国以後は文字改革が進行し、一九五六年の「漢字簡化方案」により漢字自体を簡単にするとともに日常使用する字数を大幅に削減した。漢字習得が容易になる一方、何千年間の文化の基礎が消滅したことになる。

ここまで過去に解読された六種の古代文字を紹介したが、世界にはインダス文字、ピブロス文字、オルメカ文字、サポテカ文字、ロンゴロンゴなど現在でも解読されていない文字は多数存在する。これらを解読することは消滅した民族の世界を理解する以上に、人間以外の動物には存在しない過去の世界を認識するということの意味がある。そのような意味で古代文字の解読は重要な学問である。